

「いじめ・登校拒否・暴力・・・」

- 重ねると言うことがキーワード -

文学部教授
横湯園子



自己紹介文

富士山の雪解け水のおいしい静岡県三島市に生まれました。空襲にあったのは沼津市で、五歳になる前でした。と言いますと年齢がわかってしまいますが、何のこだわりもなく年齢を言えるようになったのは、北海道の大学から中央大学に移ってきた一昨年頃のように思います。モノレールから見える富士山を眺めている時、ふっとそう思ったのがきっかけでした。年齢にふさわしい優しさや美しさ、年齢に恥じない叡知を身につけたほうが、若く見えることよりは素敵なのではないかと・・・。久しぶりに再会した富士山が老いていくことの意味を教えてくれたのだと思いました。

さて、私の研究領域は教育臨床心理学です。また臨床心理士つまり心理臨床家でもあり、スクールカウンセラーとして日野市の中学校にもいっています。三十数年前から登校拒否を中心とした神経症レベルの子どもや青年とつきあってきましたが、子どもの虐待防止の仕事もするようになってからは、暴力やそれに類する事件に関係するようになってきました。

今、私がもっとも力を注いでいるのは教育臨床心理学を学問として確立させることと、子ども・青年の生命と尊厳をいかに護るかということです。研究や仕事はかなりハードですから、心静かに過ごすことにあこがれています。

北海道では原稿が書けなくなったり、疲れると湖めぐりをしたものです。何も考えないで散歩をしたり、大きな樹によりかかっていると幸せになります。東京に戻ってきてからはそれができず、やや疲れ気味ですので、なんとか時間をみつけようと思っています。

1. はじめに

護られ感を失っていく子どもたち

愛知県の大河内清輝君のいじめられ自殺から神戸児童殺害事件、一連のナイフ事件を経て、現在に至っている。ナイフ事件の頃から、子どもたちが大人から護られているという護られ感を喪失し、自力救済をしはじめたのではないか、という思いを抱いてきた。それを強く感じたのが、埼玉県中学一年生のいじめ・いじめられの立場逆転におけるナイフ刺殺事件であった。

今、大人がしなければならないことは、子どもたちが護られているという安心感を取り戻すことなのではないか。そして、その前に癒しなのだと思う。

教育臨床心理学という角度から、事例を通して、それらについて考えてみたい。

(時間があれば、「太いロープを降ろしてほしい」の高校生や、
生きる喜びって何ですか？」の小学生の訴えを紹介したい)

2. 事例報告

事例1 「殺人者になるのが怖い」 - ある高校生の訪れ

事例2 「人生最大の事件だったのに、ボクは何もできなかった」
- 小学生の頃のいじめを、突然思い出す青年

3. 見えていても「見えない」いじめの構造

孤立化
無力化
透明化

中井久夫氏の「いじめの政治学」より



4. 安心と自由がキーワード

子どもたちが願っていることは、護られ感の実感・・・安心と自由、心の傷を癒すということであると述べてきたが、そのための一つとして、子どもの気持ちを深々と感じることができる感性の取りもどしがあるのではないかと。なぜなら、子どもの心の内界に何が起きているのか、何を授けて欲しいと願っているのか、それを解決するための当事者の力の有無などがわからなくてはならない。そして「わかる」ためには感じることができなければならない。このような感性は心理臨床家だけでなく、教師にも求められるものであり、広くは対人関係職に求められるものである。

「重ねるといふこと」

トレーニング・「重ねて」感じるもそのひとつ
絵画療法から

「重ねるといふこと」・・・例えば、ある高校教師
自分の育ってきた生活史を忘れられない、子どもとつながる大事な財産なのだ

このように考えていくと大人と子どもは「癒し癒される」関係なのではないか



社会的活動

前北海道子どもの虐待防止協会代表・現在顧問
日本児童虐待防止研究会理事
国連NGO 子どもを守る会 日本支部副代表

著書

単著『アーベル指輪のおまじない』(岩波書店)
単著『子どもの心の不思議』(柏書房)
単著『登校拒否』(あゆみ書房)
編著『カウンセリングトレーニング 心の視点』(青木書房)
岩波ブックレット『いじめ、登校拒否、暴力・・・』(岩波書房)

その他多数